

岐阜県飛騨地域と西濃地域における
お節料理に関する調査研究
(第1報)
— 中学生と母親の喫食状況について —
古橋 優子・黒木 敏子・齊藤 善弘

**A Survey of Osechi-ryori in the Hida and Seino Regions
of Gifu Prefecture (Part I)
— Regarding the Eating Conditions of Junior High School
Students and Parents —**

Yuko Furuhashi · Toshiko Kuroki · Yoshihiro Saito

Summary

A questionnaire on Osechi-ryori (traditional festive Japanese New Year's dishes) was administered to junior high school students and their mothers in the Hida and Seino regions of Gifu Prefecture. It included such questions as, "How often do you prepare Osechi-ryori at home?", "How often do you eat Osechi-ryori?", and, "How conscious are mothers in handing down the tradition of making Osechi-ryori from generation to generation?". Results from the questionnaire are as follows:

- 1) More than 90% of all families responding to the questionnaire prepare Osechi-ryori in their homes, and there appeared to be no large distinctions between local regional presentation and family-made presentation.
- 2) The percentage of students responding to the questionnaire from a representative junior high school in the Hida region (N) who ate out with their families was lower than that for the students from a representative junior high school in the Seino region (G). In addition those families of students in N junior high school have introduced many traditional Japanese events into their daily lives.
- 3) The mothers of the Hida region are more conscious of these traditions and hope to pass on such traditions as Osechi-ryori to their children.

4) The number of students from N junior high school who want to eat Osechi-ryori in the future is higher than the number from H high school . In addition, N junior high school students have a strong preference for homemade Osechi-ryori.

5) Twenty-four percent of G junior high school students eat very little Osechi-ryori.

6) Female junior high school students have more knowledge regarding traditional events than male students.

Received Oct. 30, 1999

Key words: Questionnaire, traditional festive foods, Osechi-ryori, eating conditions, consciousness

緒 言

我が国の伝統的な行事食である正月のお節料理は、現在でも多くの家庭で受け継がれてきているように思われる。短大生や大学生を対象とした調査においては、ほとんどの家庭が作って祝っており大切に継承されていたとの報告¹⁾や、94.7%がお節料理を用意していたとの報告²⁾、雑煮、お節料理とも90%以上が喫食していたとの報告³⁾などがある。また、主婦を対象とした調査⁴⁾でも、お節料理の用意率は98.5%と高い結果がでていいる。しかし、その内容は時代の影響を受けて、少しずつ変化してきていると思われる。料理も洋風化傾向を受けているものもあり、また、食の外部化に伴い、家庭での手作り品だけでなく、スーパーマーケットやデパートなどで販売されている単品のお節料理を利用する家庭も増えてきている。1980年代中頃からは、お重詰めしたお節セットの売り上げも伸びてきている。お節料理は行事食であるばかりでなく、正月三ヶ日の料理を作りおいて主婦を食事作りから解放するという保存食的な意味も合わせ持っていた。しかし、最近では冷凍冷蔵庫の普及により、各家庭でも食品の保存が簡単にできるようになったことや、正月でも営業している商店が増えてきたことなどの理由から、お節料理の保存食としての必要性は希薄になってきた。さらに、核家族が増え、価値感の多様化により、正月の行事にも関心が低くなってきていることや、ハレの日の食事とケの日の食事の区別がなくなってきたことなどから、正月の行事食であるお節料理についても、とらえ方に変化があらわれてきているのではないかと推察される。このような、家庭における行事食の伝承に関しては、母親の食生活意識の影響も大きいといわれている⁵⁾が、古来からの食生活文化が定着している地域では、家庭における食の伝承は当然のこととして行われているという報告⁶⁾もある。現在、お節料理がどの程度家庭で受け継がれているかを把握する場合、家庭での準備状況だけでなく、その家庭の子供達が、お節料理に対してどのようなとらえ方をしているかにも注目したい。お節料理の喫食状況に関しては、高校生や短大生、大学生を対象とした調査はあるが、

岐阜県飛騨地域と西濃地域におけるお節料理に関する調査研究

若い世代の中で中学生を対象とした調査は見当たらない。

そこで本報告では、家庭の食事を喫食しており、しかも、自由意志で食物を選択できる年齢である中学生に焦点をあて、岐阜県下の2地域の中学生とその母親を対象として、お節料理の準備や喫食の実態及びお節料理の伝承に関する母親の意識などについて、アンケート調査を行った。

方 法

1. 調査対象

岐阜県下を美濃地方、飛騨地方の2地域に分け、伝承性が残っていると思われる地域として、美濃地方では西部にあたる西濃地方の安八郡、飛騨地方では高山市よりそれぞれ中学校1校を選び、2・3年生の中学生とその母親419組、838人を調査対象とした。

2. 調査時期と調査方法

平成9年8月に中学校を通じて、中学生及びその母親ともに本人が記入するように質問紙に注意書きを付けて依頼し、1ヶ月後に回収した。回収率は100%、有効回答率は93%であった。

3. 質問紙の内容

質問紙は中学生用とその母親用の2種類作成した。中学生用の質問紙の内容は、(1) 性別 (2) 知っている行事 (3) お節料理の喫食状況 (4) お節料理の喫食希望 (5) お節料理の手作り希望である。母親用の質問紙の内容は、(1) 年齢・家族形態・就労形態・職業 (2) 夕食の調理担当者 (3) 夕食の調理時間 (4) 外食の頻度 (5) 家庭で取り入れている行事 (6) お節料理の調理担当者 (7) 手作りとし販品の割合 (8) 市販品の種類 (9) 市販品の購入先 (10) 手作りしているお節料理 (11) 購入しているお節料理 (12) お節料理の喫食状況 (13) お節料理の必要意識 (14) お節料理の伝承意識である。

これらの質問は多肢選択法を用いた。また、データの集計、分析^{7) 8)}には、SPSS Japan社の統計解析ソフト6.1 Jを使用し、検定は χ^2 検定で行った。処理にはアップル社製Power Macintosh 7600/200を使用した。

結果及び考察

1. 回答者の属性

本調査の分析対象となった中学生は400名で、そのうち西濃地域(安八郡)のG中学校の生徒は216名(男子107名、女子109名)であり、飛騨地域(高山市)のN中学校の生徒は184名(男子83名、女子101名)であった。また、母親を回答者としたのは、調理の担当者である場合が多く、食生活全般に対して関心が高いと考えたためである。家族形態、母親の年齢・就労形態及び職業など、対象者の属性については表1に示した。

表1 対象者の属性 人(%)

		G中学校 (西濃地域)	N中学校 (飛騨地域)
家族形態	核家族	119 (55.1)	101 (54.9)
	三世代家族	97 (44.9)	83 (45.1)
母親の 年齢	31~35才	11 (5.1)	5 (2.7)
	36~40才	80 (37.0)	59 (32.1)
	41~45才	104 (48.1)	93 (50.5)
	46~50才	20 (9.3)	26 (14.1)
	51~55才	1 (0.5)	1 (0.5)
母親の 就労形態	常勤	74 (34.3)	97 (52.7)
	パート勤務	82 (38.0)	65 (35.3)
	無職(含内職)	54 (25.0)	17 (9.2)
	記入なし	6 (2.8)	5 (2.7)
母親の 職業	事務・販売・サービス職	59 (27.3)	78 (42.4)
	専門・技術職	38 (17.6)	28 (15.2)
	自営業	23 (10.6)	27 (14.7)
	その他	45 (20.8)	31 (16.8)
	記入なし	51 (23.6)	20 (10.9)
中学生	男子	107 (49.5)	83 (45.1)
	女子	109 (50.5)	101 (54.9)

2. 中学生の知っている行事

中学生の知っている行事について、各属性とのクロス集計を行った結果を表2に示した。中学生を地域別、家族形態別、性別に分けて19種類の行事について知っているかどうかを調べ

表2 中学生の知っている行事 人(%)

	地域別		χ^2 検定	家族形態別		χ^2 検定	性別		χ^2 検定
	G中学校 (西濃地域)	N中学校 (飛騨地域)		核家族	三世代家族		男子	女子	
正月	216 (100)	183 (99.5)		219 (99.5)	180 (100)		190 (100)	209 (99.5)	
七草がゆ	177 (81.9)	129 (70.1)	**	171 (77.7)	134 (74.4)		133 (70.0)	173 (82.4)	**
節分	212 (98.1)	176 (95.7)		215 (97.7)	173 (96.1)		182 (95.8)	206 (98.1)	
ひなまつり	213 (98.6)	180 (97.8)		218 (99.1)	175 (97.2)		183 (96.3)	210 (100)	*
彼岸	41 (19.0)	60 (32.6)	**	50 (22.7)	51 (28.3)		44 (23.2)	57 (27.1)	
お花見	185 (85.6)	150 (81.5)		187 (85.0)	148 (82.2)		157 (82.6)	178 (84.8)	
子どもの日	212 (98.1)	182 (98.9)		216 (98.2)	178 (98.9)		185 (97.4)	209 (99.5)	
母の日	205 (94.9)	180 (97.8)		214 (97.3)	171 (95.0)		176 (92.6)	209 (99.5)	** *
父の日	202 (93.5)	172 (93.5)		207 (94.1)	166 (92.2)		172 (90.5)	202 (96.2)	*
七夕	212 (98.1)	182 (98.9)		217 (98.6)	177 (98.3)		184 (96.8)	210 (100)	*
土用うしの日	107 (49.5)	108 (58.7)		112 (50.9)	103 (57.2)		103 (54.2)	112 (53.3)	
お盆	212 (98.1)	175 (95.1)		212 (96.4)	175 (97.2)		182 (95.8)	205 (97.6)	
菊の節句	9 (4.2)	15 (8.2)		16 (7.3)	8 (4.4)		12 (6.3)	12 (5.7)	
敬老の日	200 (92.6)	179 (97.3)		207 (94.1)	172 (95.6)		173 (91.1)	206 (98.1)	**
お月見	167 (77.3)	130 (70.7)		165 (75.0)	132 (73.3)		135 (71.1)	162 (77.1)	
七五三	189 (87.5)	170 (92.4)		197 (89.5)	162 (90.0)		164 (86.3)	195 (92.9)	*
冬至	151 (69.9)	127 (69.0)		155 (70.5)	123 (68.3)		129 (67.9)	149 (71.0)	
クリスマス	214 (99.1)	180 (97.8)		218 (99.1)	176 (97.8)		188 (98.9)	206 (98.1)	
大みそか	211 (97.7)	184 (100)		216 (98.2)	179 (99.4)		187 (98.4)	208 (99.0)	

*p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

岐阜県飛騨地域と西濃地域におけるお節料理に関する調査研究

た結果、地域別、家族形態別、性別とも最も知られていなかった行事は「菊の節句」で、いずれも10%以下と低かった。次に知られていなかった行事は「彼岸」で、約20~30%であった。「土用うしの日」は約50~60%の中学生が知っていた。その他の行事については70%以上と高く、よく知っていた。

地域別では、「七草がゆ」を知っていたのはG中学校（西濃地域）81.9%、N中学校（飛騨地域）70.1%であり、西濃地域の中学生がより多く知っており有意差（ $P<0.01$ ）が認められた。また、他の行事に比べてあまり知られていなかった「彼岸」については、G中学校（西濃地域）19.0%、N中学校（飛騨地域）32.6%であり、飛騨地域の中学生がより多く知っており有意差（ $P<0.01$ ）が認められた。これは、後述（5節）の母親が家庭で取り入れている行事の調査結果において、N中学校（飛騨地域）の家庭で「彼岸」がより多く取り入れられていたことと関連する。

性別では、「七草がゆ」（ $P<0.01$ ）、ひなまつり（ $P<0.05$ ）、「母の日」（ $P<0.001$ ）、「父の日」（ $P<0.05$ ）、「七夕」（ $P<0.05$ ）、「敬老の日」（ $P<0.01$ ）、「七五三」（ $P<0.05$ ）の行事において有意差が認められた。これらの行事はすべて、男子に比べて女子の方が知っている割合が高かった。この結果から、行事に対する関心は男子より女子の方が高いことがわかった。

3. 中学生のお節料理の喫食状況

中学生のお節料理の喫食状況について、各属性とのクロス集計を行った結果を表3に示した。

表3 中学生のお節料理の喫食状況

		地域別		χ^2 検定	家族形態別		χ^2 検定	性別		χ^2 検定
		G中学校 (西濃地域)	N中学校 (飛騨地域)		核家族	三世代家族		男子	女子	
		人 (%)								
現在食べているか	ほとんど食べない	52 (24.1)	26 (14.1)	*	44 (20.0)	34 (18.9)		44 (23.2)	34 (16.2)	
	好きなものだけ食べる	133 (61.6)	117 (63.6)		130 (59.1)	120 (66.7)		110 (57.9)	140 (66.7)	
	ほとんどの料理を食べる	31 (14.4)	41 (22.3)		46 (20.9)	26 (14.4)		36 (18.9)	36 (17.1)	
今後食べたか	食べたい	136 (63.0)	145 (78.8)	***	158 (71.8)	123 (68.3)		129 (67.9)	152 (72.4)	
	食べたくない	80 (37.0)	39 (21.2)		62 (28.2)	57 (31.7)		61 (32.1)	58 (27.6)	
手作りがよいか	ほとんど手作りがよい	69 (51.9)	104 (72.2)	**	93 (60.4)	79 (64.8)		81 (63.8)	92 (61.3)	
	半分くらいは市販品がよい	59 (44.4)	37 (25.7)		57 (37.0)	39 (32.0)		41 (32.3)	55 (36.7)	
	ほとんど市販品がよい	5 (3.8)	3 (2.1)		4 (2.6)	4 (3.3)		5 (3.9)	3 (2.0)	

* $p<0.05$ ** $p<0.01$ *** $p<0.001$

(1) 現在お節料理を食べているか

お節料理を食べているかという質問について地域別にみたところ、G中学校（西濃地域）、N中学校（飛騨地域）とも、約60%の中学生が「好きなものだけ食べる」と答えていた。

「ほとんど食べない」と答えた中学生は、G中学校（西濃地域）では約4分の1にあたる24.1%もあり、N中学校（飛騨地域）の14.1%に比べて10%も高かった。反対に、「ほとんどの料理を食べる」と答えた中学生は、N中学校（飛騨地域）が22.3%であり、G中学校（西濃地域）の14.4%に比べて高く有意差（ $P<0.05$ ）が認められ、地域による差がはっきりとあらわれた。このようなお節料理離れの傾向は、現代の中学生の洋食に傾きやすい食嗜好が影響しているのではないかと思われる。

家族形態別では、「ほとんど食べない」と答えた中学生は核家族、三世代家族とも約20%おり、家族形態による差はみられなかった。

性別では、「ほとんど食べない」と答えた者は、男子が23.2%であるのに対して女子は16.2%と低く、男子により強くお節料理離れの傾向がみられた。

(2) 今後もお節料理を食べたいか

お節料理を今後食べてみたいかという質問について地域別にみたところ、「食べたい」と答えた中学生は、G中学校（西濃地域）では63.0%であるのに対してN中学校（飛騨地域）では78.8%と15%も高かった。反対に、「食べたくない」と答えた中学生は、G中学校（西濃地域）では37.0%であるのに対してN中学校（飛騨地域）では21.2%と低く、両地域の間有意差（ $P<0.001$ ）が認められた。G中学校（西濃地域）の生徒の4割近くが「今後食べたくない」と答えていたことは印象的であった。

家族形態別では、「今後食べたい」と答えた中学生が核家族、三世代家族ともに約70%を占め、反対に「今後食べたくない」と答えた中学生はいずれも約30%であり、ほとんど差はみられなかった。

性別では、「今後食べたい」と答えた者が男子は67.9%であるのに対して、女子は72.4%とやや高かった。地域別、家族形態別、性別とも、「現在ほとんど食べない」と答えた者の割合よりも「今後食べたくない」と答えた者の割合が高くなっており、お節料理離れが今後進んでいくことが予想される結果となった。

(3) お節料理は手作りがよいか

お節料理は家で手作りしたものがよいかという質問について地域別にみたところ、両地域の間有意差（ $P<0.01$ ）が認められた。両地域とも半数以上が「ほとんど手作りがよい」と答えていたが、G中学校（西濃地域）では51.9%であるのに対してN中学校（飛騨地域）では72.2%と20%以上も高く、より強く手作りのものを希望していることがわかった。また、「半分くらいは市販品がよい」と答えた中学生は、G中学校（西濃地域）では44.4%であるのに対してN中学校（飛騨地域）では25.7%と約20%も低かった。従ってこれらのことから、N中学校（飛騨地域）の生徒の家庭では、日常の食事も市販品の利用率が低く、手作りの割合が高いのではないかと推察される。

家族形態別では、「ほとんど手作りがよい」と答えた者は、核家族が60.4%であるのに対

岐阜県飛騨地域と西濃地域におけるお節料理に関する調査研究

して三世代家族は64.8%とやや高かったものの、大きな差はみられなかった。

性別では、いずれも60%以上の者が「ほとんど手作りがよい」と答えており、差はあまりみられなかった。

4. 夕食の調理担当者・調理時間、外食の頻度

夕食の調理担当者・調理時間、外食の頻度について、母親を対象に調査し、各属性とのクロス集計を行った結果を表4に示した。

表4 夕食・外食について 人(%)

		地域別		χ ² 検定	家族形態別		χ ² 検定
		G中学校 (西濃地域)	N中学校 (飛騨地域)		核家族	三世代家族	
夕食の調理担当者	母(本人)	194 (89.8)	157 (85.3)		214 (97.3)	137 (76.1)	***
	父	0 (0)	0 (0)		0 (0)	0 (0)	
	祖母	17 (7.9)	16 (8.7)		2 (0.9)	31 (17.2)	
	祖父	1 (0.5)	0 (0)		0 (0)	1 (0.6)	
	子供	1 (0.5)	1 (0.5)		2 (0.9)	0 (0)	
	その他	3 (1.4)	10 (5.4)		2 (0.9)	11 (6.1)	
夕食の調理時間	30分以内	10 (4.6)	17 (9.2)		18 (8.2)	9 (5.0)	*
	30分~1時間	152 (70.4)	124 (67.4)		159 (72.3)	117 (65.0)	
	1時間以上	54 (25.0)	43 (23.4)		43 (19.5)	54 (30.0)	
外食の頻度	ほとんどしない	84 (39.1)	124 (67.4)	***	98 (44.7)	110 (61.1)	**
	1ヶ月に1~2回	122 (56.7)	56 (30.4)		113 (51.6)	65 (36.1)	
	1週間に1~2回	9 (4.2)	4 (2.2)		8 (3.7)	5 (2.8)	
	1週間に3~4回	0 (0)	0 (0)		0 (0)	0 (0)	
	ほとんど毎日	0 (0)	0 (0)		0 (0)	0 (0)	

*p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

(1) 夕食の調理担当者

夕食の調理担当者は、両地域とも母(本人)が85%以上で、次いで「祖母」が約8%であった。

家族形態別では、「祖母」が夕食を調理している割合が三世代家族では17.2%であり、核家族の0.9%に比べて高く、有意差(P<0.001)が認められた。

(2) 夕食の調理時間

次に、夕食の調理時間については、両地域とも「30分~1時間」と答えた母親が約7割を占めていて最も多く、次いで「1時間以上」と答えた者が両地域とも約4分の1おり、地域による差はみられなかった。

家族形態別では、夕食の調理時間に有意差(P<0.05)が認められた。「1時間以上」と答えた者が核家族では19.5%であるのに対して、三世代家族では30.0%と高かった。これは、三世代家族の場合、子供と老人では食物の嗜好も異なることが多いため、食卓に並ぶ料理の種類が増えるからだと思われる。

(3) 外食の頻度

外食の頻度については地域別で有意差 ($P<0.001$) が認められた。外食を「ほとんどしない」と答えた母親がN中学校 (飛騨地域) では67.4%もあり、G中学校 (西濃地域) の39.1%をはるかに上回っていた。逆に「1ヶ月に1~2回」と答えた者はG中学校 (西濃地域) で56.7%であるのに対して、N中学校 (飛騨地域) では30.4%と低く、地域による差がはっきりとあらわれた。N中学校 (飛騨地域) では約3分の2の家庭が外食をほとんどしていないことがわかった。

家族形態別でも有意差 ($P<0.01$) が認められた。外食を「ほとんどしない」と答えた者が、三世代家族では61.1%と核家族の44.7%に比べて高く、「1ヶ月に1~2回」と答えた者は核家族では51.6%であるのに対して、三世代家族では36.1%と低かった。これは、三世代家族では人数が多いので出費が増えることや、年齢の幅が大きくなるために食物の嗜好が異なる場合が多く、また、家族全員が同時刻に揃いにくいことなどが理由に考えられる。

5. 家庭で取り入れている行事

家庭で実際に取り入れている行事について、母親を対象に調査し、各属性とのクロス集計を行った結果を表5に示した。母親を地域別、家族形態別に分けて19種類の行事について、

表5 家庭で取り入れている行事 人 (%)

	地域別		χ^2 検定	家族形態別		χ^2 検定
	G中学校 (西濃地域)	N中学校 (飛騨地域)		核家族	三世代家族	
正月	215 (99.5)	183 (99.5)		219 (99.5)	178 (99.4)	
七草がゆ	94 (43.5)	88 (47.8)		103 (46.8)	78 (43.6)	
節分	120 (55.6)	135 (73.4)	***	142 (64.5)	112 (62.6)	
ひなまつり	123 (56.9)	103 (56.0)		121 (55.0)	104 (58.1)	
彼岸	93 (43.1)	116 (63.0)	***	101 (45.9)	107 (59.8)	**
お花見	49 (22.7)	39 (21.2)		48 (21.8)	40 (22.3)	
子どもの日	124 (57.4)	112 (60.9)		125 (56.8)	110 (61.5)	
母の日	107 (49.5)	102 (55.4)		117 (53.2)	91 (50.8)	
父の日	107 (49.5)	97 (52.7)		111 (50.5)	92 (51.4)	
七夕	40 (18.5)	61 (33.2)	**	53 (24.1)	48 (26.8)	
土用うしの日	163 (75.5)	158 (85.9)	*	171 (77.7)	149 (83.2)	
お盆	182 (84.3)	167 (90.8)		185 (84.1)	163 (91.1)	
菊の節句	1 (0.5)	3 (1.6)		2 (0.9)	2 (1.1)	
敬老の日	70 (32.4)	70 (38.0)		55 (25.0)	85 (47.5)	***
お月見	42 (19.4)	12 (6.5)	***	23 (10.5)	31 (17.3)	
七五三	67 (31.0)	78 (42.4)	*	77 (35.0)	68 (38.0)	
冬至	107 (49.5)	116 (63.0)	**	111 (50.5)	111 (62.0)	*
クリスマス	202 (93.5)	173 (94.0)		210 (95.5)	164 (91.6)	
大みそか	204 (94.4)	182 (98.9)	*	210 (95.5)	175 (97.8)	

* $p<0.05$ ** $p<0.01$ *** $p<0.001$

実際に家庭で取り入れているかどうかを調べた結果、N中学校 (飛騨地域) の家庭の方が、G中学校 (西濃地域) の家庭より行事を多く取り入れていた。N中学校 (飛騨地域) の家庭でよ

岐阜県飛騨地域と西濃地域におけるお節料理に関する調査研究

り多く取り入れられていた行事のうち、有意差が認められたものは、「節分」(P<0.001)、「彼岸」(P<0.001)、「七夕」(P<0.01)、「土用うしの日」(P<0.05)、「七五三」(P<0.05)、「冬至」(P<0.01)、「大みそか」(P<0.05)であった。このように、行事を大切にすることは飛騨地域の方がはるかに強いことがわかった。唯一、「お月見」だけは、G中学校(西濃地域)が19.4%とN中学校(飛騨地域)の6.5%に比べて高く、有意差(P<0.001)が認められた。これは、飛騨地域の高山市⁹⁾は、内陸型の盆地特有の気候を示し、寒暖の差が大きく、特に夜間の冷込みがきびしく、我が国でも有数の寒冷地帯となっており冬が長いこと、温暖な平野部である西濃地域に比べて、月を観賞する行事が定着しにくかったのではないかと思われる。「菊の節句」¹⁰⁾は「重陽の節句」ともいわれ、不老長寿の妙薬と信じられてきた菊にちなんだ料理を食べる習慣があるが、現在では祝うことの少ない行事になっており、今回の調査でも両地域ともほとんど取り入れていなかった。

家族形態別では、三世代家族で多く取り入れられていた行事のうち有意差が認められたものは、「彼岸」(P<0.01)、「敬老の日」(P<0.001)、「冬至」(P<0.05)であった。老人のいる三世代家族では、やはり核家族より「彼岸」や「敬老の日」を大切にしていることがうかがえた。

6. お節料理の調理担当者、市販品の利用

お節料理の調理担当者、手作りとし販品の割合、市販品の種類、市販品の購入先について、母親を対象に調査し、各属性とのクロス集計を行った結果を表6に示した。

表6 お節料理の調理担当者、市販品の利用 人(%)

		地域別		χ ² 検定	家族形態別		χ ² 検定
		G中学校 (西濃地域)	N中学校 (飛騨地域)		核家族	三世代家族	
調理担当者	母(本人)	163 (76.5)	121 (66.5)		166 (76.5)	117 (66.1)	**
	父	1 (0.5)	0 (0)		1 (0.5)	0 (0)	
	祖母	22 (10.3)	28 (15.4)		19 (8.8)	31 (17.5)	
	祖父	0 (0)	0 (0)		0 (0)	0 (0)	
	子供	2 (0.9)	0 (0)		2 (0.9)	0 (0)	
	つくらない	9 (4.2)	14 (7.7)		17 (7.8)	6 (3.4)	
	複数回答	16 (7.5)	19 (10.4)		12 (5.5)	23 (13.0)	
手作りとし販品の割合	ほとんど手作り	27 (12.8)	26 (14.4)		26 (12.2)	27 (15.3)	
	手作りとし販品	163 (77.3)	129 (71.7)		155 (72.8)	136 (76.8)	
	ほとんど市販品	21 (10.0)	25 (13.9)		32 (15.0)	14 (7.9)	
市販品の種類	単品を複数購入	144 (94.7)	117 (92.9)		139 (93.9)	121 (93.8)	
	重箱セットを購入	8 (5.3)	6 (4.8)		7 (4.7)	7 (5.4)	
	複数回数	0 (0)	3 (2.4)		2 (1.4)	1 (0.8)	
市販品の購入先	スーパーマーケット	120 (78.9)	98 (77.2)	*	121 (81.8)	97 (74.6)	
	デパート	9 (5.9)	1 (0.8)		5 (3.4)	5 (3.8)	
	個人商店	6 (3.9)	9 (7.1)		4 (2.7)	11 (8.5)	
	その他	9 (5.9)	5 (3.9)		7 (4.7)	6 (4.6)	
	複数回答	8 (5.3)	14 (11.0)		11 (7.4)	11 (8.5)	

*p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

(1) お節料理の調理担当者

お節料理の調理担当者を地域別で見ると、母（本人）と答えた者がG中学校（西濃地域）では76.5%であり、N中学校（飛騨地域）の66.5%に比べて高く、「祖母」と答えた者はG中学校（西濃地域）が10.3%であるのに対して、N中学校（飛騨地域）では15.4%とやや高かった。今回の調査では、西濃地域、飛騨地域ともに、核家族約55%三世代家族約45%の家族形態であったにもかかわらず、このように飛騨地域では祖母がお節料理を調理担当している割合がやや高かったことは興味深い。

家族形態別では、有意差 ($P < 0.01$) が認められた。母（本人）と答えた者が核家族では76.5%であり、三世代家族の66.1%に比べて高く、「祖母」と答えた者は、核家族では8.8%であるのに対して三世代家族では17.5%と高かった。三世代家族の「複数回答」13.0%は母親と祖母が共同で調理していると思われる。核家族で「祖母」8.8%とあるのは、祖母が作ったお節料理を持ち帰ったり、正月を祖父母の家で過ごす場合が含まれると思われる。また、核家族で「つくらない」と答えた者が7.8%いるのも、同様に祖父母の家で正月を過ごす場合が含まれると思われる。この結果から「つくらない」と答えた者は、地域別、家族形態別による差はほとんどなく、いずれも10%以下であり、90%以上の家庭でお節料理を準備していることがわかった。

(2) 手作りとし販品の割合

家庭でのお節料理について、手作りとし販品の割合を調べてみると、両地域とも70%以上が「手作りとし販品」と答えていた。これは、お節料理は77.8%の家庭が手作りとし販品を併せて整えていた。という植田の報告¹⁰⁾に近い値を示した。また、「ほとんど手作り」と答えた者は両地域とも約13~14%であり、「ほとんどし販品」と答えた者は両地域とも10~13%で、地域による差はあまりみられなかった。従って、お節料理をほとんど手作りしている家庭は減少してきていることがわかった。

家族形態別では、「手作りとし販品」と答えた者が核家族、三世代家族とも70%以上であった。三世代家族では「ほとんど手作り」が15.3%あり、「ほとんどし販品」の7.9%に比べて約2倍と高かった。反対に、核家族では「ほとんどし販品」と答えた者が15.0%あり、「ほとんど手作り」の12.2%に比べてやや高かった。この結果から、三世代家族では手作りの割合がやや高く、核家族ではし販品の割合がやや高いといえる。

(3) し販品の種類

家庭で利用するし販のお節料理の種類についてみると、地域別では両地域とも、また、家族形態別でも核家族、三世代家族とも90%以上が「単品を複数購入する」と答えており、地域、家族形態による差はみられなかった。

(4) し販品の購入先

利用するし販のお節料理の購入先をみると、地域別で有意差 ($P < 0.05$) が認められた。

岐阜県飛騨地域と西濃地域におけるお節料理に関する調査研究

「スーパーマーケット」と答えた母親が両地域とも70%以上と最も多く、G中学校（西濃地域）が78.9%、N中学校（飛騨地域）が77.2%とほぼ同じ割合であった。「デパート」と答えた者はG中学校（西濃地域）が5.9%であるのに対してN中学校（飛騨地域）では0.8%と低かった。また、「個人商店」と答えた者はG中学校（西濃地域）が3.9%であるのに対して、N中学校（飛騨地域）では7.1%とやや高かった。

家族形態別では、やはり「スーパーマーケット」と答えた者が核家族、三世代家族とも最も多く、いずれも70%以上であった。「個人商店」と答えた者は核家族が2.7%であるのに対して三世代家族では8.5%であり、わずかではあるが高かった。「デパート」と答えた者は核家族、三世代家族とも約3%であり、差はなかった。

7. 手作りしているお節料理

次に、家庭で手作りしているお節料理について、母親を対象に調査し、各属性とのクロス集計を行った結果を表7に示した。

表7 手作りしているお節料理

人 (%)

	地域別		χ^2 検定	家族形態別		χ^2 検定
	G中学校 (西濃地域)	N中学校 (飛騨地域)		核家族	三世代家族	
黒豆	107 (56.3)	93 (60.0)		89 (49.2)	111 (68.1)	***
数の子	87 (45.8)	81 (52.3)		90 (49.7)	77 (47.2)	
たたきごぼう	54 (28.4)	22 (14.2)	**	39 (21.5)	37 (22.7)	
田作り	69 (36.3)	59 (38.1)		67 (37.0)	61 (37.4)	
昆布巻き	32 (16.8)	26 (16.8)		30 (16.6)	28 (17.2)	
きんとん	59 (31.1)	60 (38.7)		63 (34.8)	55 (33.7)	
なます、菊花かぶなど	93 (48.9)	79 (51.0)		83 (45.9)	89 (54.6)	
卵料理	89 (46.8)	85 (54.8)		95 (52.5)	78 (47.9)	
筑前煮	73 (38.4)	64 (41.3)		79 (43.6)	58 (35.6)	
魚の焼き物	118 (62.1)	115 (74.2)	*	122 (67.4)	111 (68.1)	
えびの塩焼き	89 (46.8)	51 (32.9)	*	77 (42.5)	63 (38.7)	
酢だこ	80 (42.1)	33 (21.3)	***	67 (37.0)	46 (28.2)	
その他	41 (21.6)	32 (20.6)		33 (18.2)	39 (23.9)	

*p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

地域別でみると、G中学校（西濃地域）で手作りの割合が高かったお節料理は、「たたきごぼう」(P<0.01)、「えびの塩焼き」(P<0.05)、「酢だこ」(P<0.001)の3品目であり、いずれも有意差が認められた。それ以外はすべて、N中学校（飛騨地域）での手作りの割合が高く、その中でも「魚の焼き物」は有意差(P<0.05)が認められた。従って、N中学校（飛騨地域）の家庭の方がG中学校（西濃地域）の家庭より、手作りの割合が高いといえる。

家族形態別では大差はなかったが、「黒豆」だけは有意差(P<0.001)が認められ、核家族の49.2%に比べて三世代家族は68.1%と高かった。

8. 購入しているお節料理

前述（6節）の結果で、市販のお節料理を利用する家庭では、90%以上が単品を複数購入すると答えていたが、購入する品目に地域による差、家族形態による差があるか調べるために、単品を複数購入すると答えた母親を対象に、購入しているお節料理について調査し、各属性とのクロス集計を行った結果を表8に示した。

表8 購入しているお節料理 人 (%)

	地域別		χ^2 検定	家族形態別		χ^2 検定
	G中学校 (西濃地域)	N中学校 (飛騨地域)		核家族	三世帯家族	
黒豆	53 (36.8)	49 (41.9)		64 (46.0)	37 (30.6)	*
数の子	76 (52.8)	56 (47.9)		71 (51.1)	60 (49.6)	
たたきごぼう	6 (4.2)	7 (6.0)		6 (4.3)	7 (5.8)	
田作り	64 (44.4)	70 (59.8)	*	66 (47.5)	67 (55.4)	
昆布巻き	100 (69.4)	70 (59.8)		85 (61.2)	85 (70.2)	
きんとん	68 (47.2)	67 (57.3)		68 (48.9)	66 (54.5)	
なます, 菊花かぶなど	13 (9.0)	20 (17.1)		19 (13.7)	14 (11.6)	
卵料理	49 (34.0)	41 (35.0)		49 (35.3)	41 (33.9)	
筑前煮	4 (2.8)	5 (4.3)		5 (3.6)	4 (3.3)	
魚の焼き物	4 (2.8)	3 (2.6)		5 (3.6)	2 (1.7)	
えびの塩焼き	12 (8.3)	17 (14.5)		19 (13.7)	10 (8.3)	
酢だこ	11 (7.6)	34 (29.1)	***	23 (16.5)	22 (18.2)	
その他	17 (11.8)	16 (13.7)		16 (11.5)	17 (14.0)	

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$ *** $p < 0.001$

地域別では、「田作り」($P < 0.05$)、「酢だこ」($P < 0.001$)がN中学校（飛騨地域）での購入率が高く、有意差が認められた。

家族形態別では、「黒豆」を購入すると答えた者が核家族では46.0%であったのに対して、三世帯家族では30.6%と低く、有意差 ($P < 0.05$) が認められた。これは、黒豆の手作り率が核家族よりも三世帯家族の方が高く、有意差が認められた前述（7節）の結果と一致した。

9. 母親のお節料理の喫食状況及び伝承に関する意識

お節料理の喫食状況と必要意識、及び伝承に関する意識について、母親を対象に調査し、各属性とのクロス集計を行った結果を表9に示した。

(1) お節料理の喫食状況

母親のお節料理の喫食状況を地域別にみると、「ほとんどの料理を食べる」と答えた者が、両地域とも60%以上であった。

家族形態別では、有意差 ($P < 0.05$) が認められた。「好きなものだけ食べる」と答えた者が核家族では37.9%であり、三世帯家族の27.0%に比べて高く、「ほとんどの料理を食べる」と答えた者は核家族が55.7%であるのに対して、三世帯家族では69.1%とかなり高かった。これは、三世帯家族では親子の他に祖父母もいるため、日常の食事が和食に傾きやすく、和

岐阜県飛騨地域と西濃地域におけるお節料理に関する調査研究

表9 母親のお節料理の喫食状況、伝承に関する意識 人(%)

	地域別		χ^2 検定	家族形態別		χ^2 検定
	G中学校 (西濃地域)	N中学校 (飛騨地域)		核家族	三世大家族	
喫食状況	ほとんど食べない	8 (3.7)	13 (7.1)	14 (6.4)	7 (3.9)	*
	好きなものだけ食べる	77 (36.0)	54 (29.3)	83 (37.9)	48 (27.0)	
	ほとんどの料理を食べる	129 (60.3)	117 (63.6)	122 (55.7)	123 (69.1)	
お節料理は必要であると思うか	必要であると思う	112 (52.1)	117 (63.6)	128 (58.2)	100 (56.2)	
	必要でないと思う	50 (23.3)	33 (17.9)	45 (20.5)	38 (21.3)	
	わからない	53 (24.7)	34 (18.5)	47 (21.4)	40 (22.5)	
お節料理を子供に受け継がせていきたいと思うか	思う	108 (50.0)	125 (68.7)	127 (58.0)	105 (59.0)	***
	思わない	47 (21.8)	19 (10.4)	36 (16.4)	30 (16.9)	
	わからない	61 (28.2)	38 (20.9)	56 (25.6)	43 (24.2)	

* $p<0.05$ ** $p<0.01$ *** $p<0.001$

食であるお節料理に親しみをもち割合が高いことも理由の一つに考えられる。

(2) お節料理は必要であると思うか

お節料理は必要であると思うかについて母親に質問したところ、地域別では有意差は認められなかったものの、「必要であると思う」と答えた者がN中学校（飛騨地域）では63.6%であり、G中学校（西濃地域）の52.1%より10%以上も高く、お節料理をより強く必要としていることがわかった。

家族形態別では、ほとんど差はみられなかった。

(3) お節料理を子供に受け継がせていきたいと思うか

次に、お節料理の伝承に関する意識を調べるために、お節料理を日本の伝統食として子供に受け継がせていきたいと思うかについて母親に質問したところ、地域別で有意差 ($P<0.001$) が認められた。「思う」と答えた者がN中学校（飛騨地域）では68.7%であり、G中学校（西濃地域）の50.0%に比べてかなり高かった。また、「思わない」と答えた者はG中学校（西濃地域）が21.8%であるのに対して、N中学校（飛騨地域）では10.4%と低かった。この結果から、地域による差がはっきりとあらわれ、N中学校（飛騨地域）の母親の方が伝統食を残していきたいという意識が高いことがわかった。ここで、さらに、2つの中学校の間だけでなく、西濃地域と飛騨地域の間に伝承に関する意識の差があるかを調べるために、母比率の区間推定を行ってみたところ、西濃地域では43~56%（信頼度95%）となり、飛騨地域では61~75%（信頼度95%）となった。そこで、母比率の差の片側検定を行ったところ、有意差 ($P<0.01$) が認められ、飛騨地域の母親は西濃地域の母親に比べて、お節料理の伝承に関する意識がかなり高いことが明らかとなった。

家族形態別では、「思う」と答えた者が核家族、三世大家族とも約60%であり、「思わない」と答えた者はいずれも16%で、ほとんど差はみられなかった。

10. 母親の伝承に関する意識とお節料理の喫食状況との関連

次に、母親の伝承に関する意識とお節料理の喫食状況との関連を調べるために、クロス集計を行った結果を表10に示した。「子供に受け継がせていきたいと思う」と答えた母親の73.8%が、「ほとんどの料理を食べる」と答えていたのに対して、「子供に受け継がせていきたいと思わない」と答えた母親では40.0%と低かった。また、「思う」と答えた母親の24.9%が「好きなものだけ食べる」と答えていたのに対して、「思わない」と答えた母親では47.7%と高かった。この結果から、お節料理を子供に伝承していきたいという意識の高い母親は、お節料理の喫食率も高いことがわかった。

表10 母親の伝承に関する意識とお節料理の喫食状況 人 (%)

	お節料理を子供に受け継がせていきたいと思う	お節料理を子供に受け継がせていきたいと思わない
ほとんど食べない	3 (1.3)	8 (12.3)
好きなものだけ食べる	58 (24.9)	31 (47.7)
ほとんどの料理を食べる	172 (73.8)	26 (40.0)

11. 母親の伝承に関する意識と家庭で取り入れている行事数との関連

さらに、母親の伝承に関する意識と家庭で取り入れている行事数との間の関連を調べるために、クロス集計を行ってグラフ化したものが図1である。家庭で取り入れている行事数の平均は、「子供に受け継がせていきたいと思う」と答えた母親の家庭では11.2%であるのに対して、「思わない」と答えた母親の家庭では8.6%と少なかった。この結果から、行事を多く取り入れている家庭の母親の方が、お節料理を子供に伝承していきたいという意識が高いことがわかった。

今回の調査の結果、中学生のお節料理の喫食状況、喫食希望、手作り希望のいずれも地域別で有意差が認められ、N中学校（飛騨地域）の中学生で高く、家族形態別ではほとんど差が認められなかった。また、家庭で取り入れている行事についても地域差が顕著であり、N中学校（飛騨地域）の生徒の家庭で多く取り入れていた。母親のお節料理の伝承に関する意識については、G中学校、N中学校の母親の調査結果から、西濃地域、飛騨地域の母比率の区間推定を行い、両地域の母比率の差の検定を行ったところ、有意差が認められ、飛騨地域の母親の方が伝承に関する意識が高いことが明らかとなった。従って、飛騨地域の人々は、西濃地域の人々に比べて、お節料理を残していきたいという気持が強く、その気持が子供達にも自然に受け継がれているように思われた。

岐阜県飛騨地域と西濃地域におけるお節料理に関する調査研究

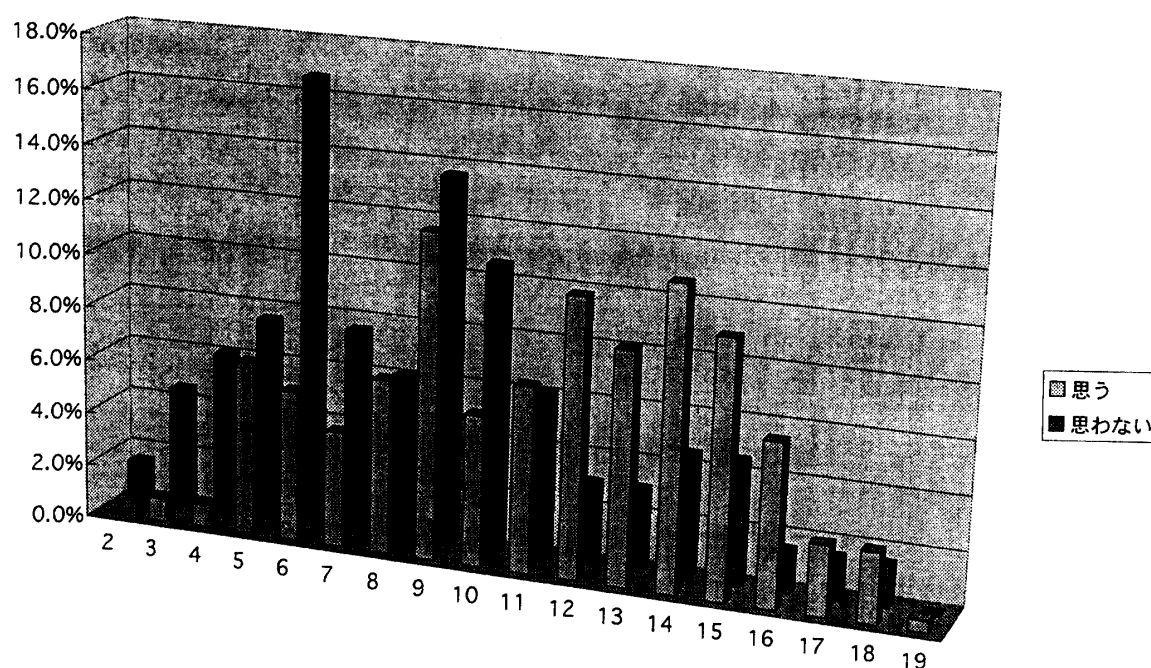


図1 母親の伝承に関する意識と家庭で取り入れている行事数

要 約

日本の伝統的な行事食である正月のお節料理について、どの程度家庭で準備されているか、また、その喫食状況及び母親の伝承に関する意識などについて、岐阜県下の飛騨地域と西濃地域の中学生及びその母親を対象にアンケート調査を行った。以下に結果を要約する。

1. 全体の90%以上の家庭でお節料理を準備しており、地域別、家族形態別による差はほとんどみられなかった。
2. N中学校（飛騨地域）の生徒の家庭は、G中学校（西濃地域）の生徒の家庭に比べて外食率が低く、多くの行事を日常生活の中に取り入れていた。
3. 飛騨地域の母親は西濃地域の母親に比べて、お節料理の伝承に関する意識がかなり高かった。
4. N中学校（飛騨地域）の生徒はG中学校（西濃地域）の生徒に比べて、今後もお節料理の喫食を希望しており、しかも、手作りのものをより強く希望していた。
5. G中学校（西濃地域）の生徒の24%が、お節料理をほとんど喫食していなかった。
6. 女子中学生は男子中学生よりも、多くの行事について知っている割合が高かった。

終わりに、調査に当たり、御協力をいただきました安八郡、高山市のそれぞれの中学校の先生方、生徒の皆さん、並びに御父母の方々に心より感謝申し上げます。

古橋優子・黒木敏子・齊藤善弘

本報告の要旨は、平成11年10月30日、第45回日本家政学会中部支部総会において発表した。

参 考 文 献

- 1) 山下英代：正月料理・年中行事食の意識の動向調査を通して、家庭科教育、64巻12号、85～90（1990）
- 2) 松井淳江、服部律子、船守記美代、中林珠絵：本学における正月料理の調査に関する一考察（その三）—お節料理—、杉野女子大学紀要、34、149～158（1997）
- 3) 真部真理子、橋本慶子：正月料理の準備と喫食にみる伝統の継承と変化、日本調理科学会誌、32、120～127（1999）
- 4) 株式会社紀文食品：おせち料理商戦始まる—正月は大切な伝統行事—、食の科学、166号、90～95（1991）
- 5) 由比ヨシ子、田中伸子、西川真理子：行事食から見た母親の家庭における食教育、昭和女子大学「女性文化研究所紀要」43巻第5号、61～69（1990）
- 6) 由比ヨシ子：母親の食生活意識と家庭における食の伝承との関係—正月料理に関して—、家庭科教育、72巻12号、82～87（1998）
- 7) Mark Rodeghier 著、西澤由隆・西澤浩美訳：誰にでもできるSPSSによるサーベイリサーチ、丸善（1997）
- 8) 丹後俊郎、岡田美保子：SPSS Macintosh版 医療統計の基礎と実際、秀潤社（1996）
- 9) 高山市：平成7年度版 高山市のあらまし（1995）
- 10) 辻 勲：お祝いの行事料理全集、辻学園出版事業部、183（1993）
- 11) 植田和美：正月料理における加工食品の利用実態、四国大学紀要、4、91～95（1995）